

唐様書家「沼尻竜厓」の書と版刻

岩坪 充雄

一、はじめに

江戸時代の唐様書家に沼尻竜厓（陸其章）という人物がいた。江戸時代の書家というと今日では注目度が低い。或いは現代人に人気の良寛さんが嫌いなもの料理人の料理に並んで書家の書も挙げられていることが原因して江戸時代の書家が避けられるのか、そもそも近代以降、日本人が日用筆記から毛筆を捨てて、何でも活字文字にしたがる事から、読めない毛筆文字の生産者である書家を避けるのか、それとも現代の経済社会における市場価値として、書より画の方に人氣があるからなのか、理由は何にせよ江戸の書家、沼

尻竜厓など現代では殆ど忘れられた人物に属するものと思われた。しかし、ワールドワイドウェブの環境が整って来て、その名さえ視野に入り、PC端末によってネットに検索をかければ、とりあえず人名辞書の事項は簡単に読める世界になっている。この安直さも知識の共有化推進という一面では、社会的効果ありと評価すべきなのだろう。そこで人名辞書レベルの伝記事項については省略に従い贅言しない。

そもそも筆者にとつて沼尻竜厓の発見は何であつたのか。江戸時代を書道史研究の中で特色づけようとするれば、儒学振興にともなう唐様書道の流行と、その流行の背景に和刻法帖出版の隆盛は言を俟たないものだろう。その中で唐様書家でありつつも一方で和刻法帖版刻者である

点で注目すべき人物として沼尻竜厓の存在があった。さらに近年（二〇〇九年）、沼尻竜厓の姪、沼尻墨僊の展覧が土浦市立博物館第三〇回特別展で行われる中で、合わせて沼尻竜厓に関する資料も公開されるなど、僅かではあるが一般の視野にも入る程度の注目が起こりつつ、二〇一二年に筆者は長年探していた沼尻竜厓の和刻法帖版刻の仕事の一つとして『大学』の上梓について確認できたことを機会に本稿をなすものである。

沼尻竜厓について、伝記的詳細を見るには前述の土浦市立博物館での展覧図録「沼尻墨僊」に収録されている「沼尻修平・墨僊年譜」が詳細であり、同館学芸員木塚久仁子氏の著にかかる「沼尻修平―墨僊に影響を与えた従兄」がまとまった最新成果だろう。^②

その少し前（一九九九年）に大阪の米田弥太郎氏がその著『近世書人の表現と精神』（柳原書店刊）の中で書いた「細井広沢の門流」で沼尻竜厓の著書で書論を語る著『習書論童』に一章を設けている。^③

沼尻竜厓の版刻について言及したものは『書の友』第六卷第十二号の臨時増刊（昭和十五年刊）「碑版法帖之基礎知識」に寄せられた望月茂の「陸其章と摸刻法帖」（九

一頁く九五頁）がある^④。その中で望月氏が『陸其章沼尻修平系譜、同尺牘拾遺』という謄写本を二十部つくった事に触れているがこちらは未見である。

他に丸山季夫『刻師名寄』^⑤も見たが、望月茂の著に拠っている記述であった。

まず注目するのは水府蔵『大学』を沼尻竜厓が翻刻した記事で、それは『書の友』の望月氏の稿に見るのである。望月氏は松平楽翁の下屋敷に開催された雅会に参加した内容を書簡として残したものを紹介し^⑥、ここで楽翁より水府珍藏の『大学』の摸刻を依頼されたとしている。「取平は、楽翁の意を承けて、直ちに摸刻を完成したが、故障が出て、これは、世の中へ出すことができなくなつて、そのまま、白川表へ秘蔵になつた。今も、白河家に尚保存されて居るかもしれない。」と続けて記述するが、「ここに出て来る水府珍藏の趙子昂大学の摸刻は、私はまだ見て居らない。」とも述べている。望月氏の記述では沼尻竜厓の版刻した『大学』は世に出せなかつたかの如くに書くのだが、これは確かに存在していたのである。以下、沼尻竜厓版の和刻法帖『大学』について言及していくだろう。



図1・成章堂の垂裕閣法帖『大学』の冒頭と本文末部分

二、和刻法帖の『大学』

沼尻竜厓が水戸藩の持つ大学を版刻する動機としては、楽翁からの依頼として問題なからうと考える。推測の域は出ないが、沼尻竜厓という一隠士にとつて水府珍藏の大学を模写する機会がそう簡単に実現するとも考えられない。楽翁の口利きを想像すれば、或いは可能であったのではなからうか。楽翁と沼尻竜厓を繋いだのは楽翁の家臣である長尾大池が沼尻竜厓の門人であつたからというもので、このような人と人との繋がりを探つていくのも歴史というパズルを解く快感がある。

水府の持つ趙子昂が書いたという真蹟「大学」が現在どうなっているのかは知らないが、水戸版の法帖で『大学』といえば成章堂が正面版で上梓したものが最も知られている。今日それを見ても正面版和刻法帖としての出来はずばらしいものと評価でき、和刻法帖の最高峰の一つを見るが如きである。その版木は比較的長く残つていたようで、「大学」部分のみ単行させた近代摺りの物もあるようだ。

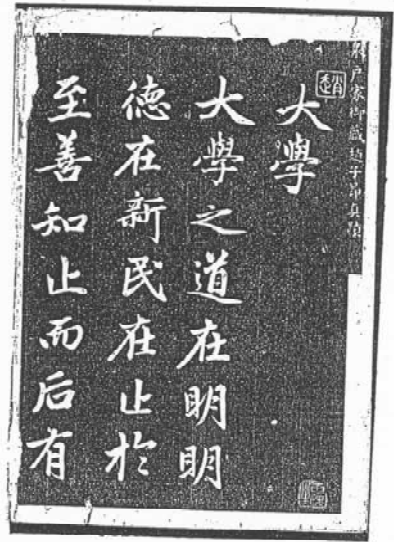


図2・沼尻竜厓版『大学』の冒頭と本文末尾

その成章堂版『大学』は『垂裕閣法帖』全十七帖の中に収録された第十三冊目の一冊である(図1参照)。

家蔵のものは縦三十一cm、横十五cmの板表紙。見開き二十八面の本文に跋文二面。合わせて三〇面で一冊となっている。跋文は全て文政元年に書かれている。この年を成章堂版『大学』の完成時と考えてよからう。

一方、殆ど知られていなかった謎の沼尻竜厓版『大学』は、やはり正面版の帖仕立てで、縦二十八・五cm横十八・五cm。見開き三十二面である。家蔵のものには序跋文は見えない。本文冒頭に「水戸家御蔵趙子昂真蹟」とあり、末尾には「己未歳 竜厓陸其章摸刻其章」と小さく刻まれているので沼尻竜厓の手にかかるものであることは間違いない。(図2参照) 帖末の己未は寛政十一年にあたるだろう。成章堂版『大学』に先行すること十九年前のことである。本屋の奥付など無く、もとより市場に出そうという意図はなかったものだろう。

沼尻竜厓版と成章堂版のもっとも大きな違いは何か。並べて眺めれば一目瞭然で、一行の字詰めが異なる。沼尻竜厓版は一行当たり七字詰。成章堂版は八字である。故に沼尻龍厓版は本文三十二面。成章堂版は本文二十八

図3・咸章堂版（右）と沼尻童厓版（左）の比較

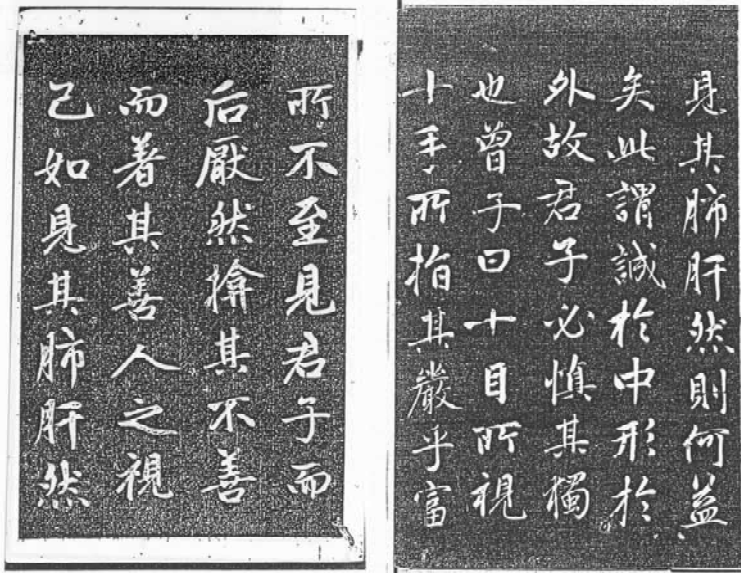


図4・栗山版『大学』、冒頭と末尾、左版法帖である

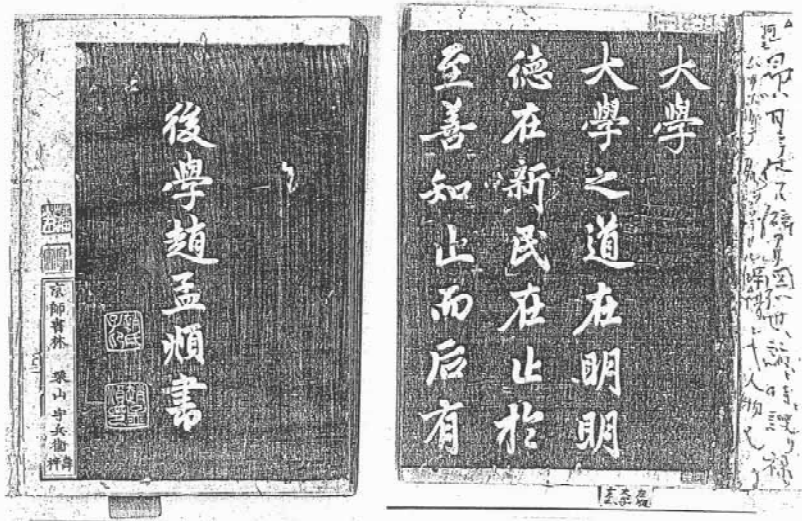
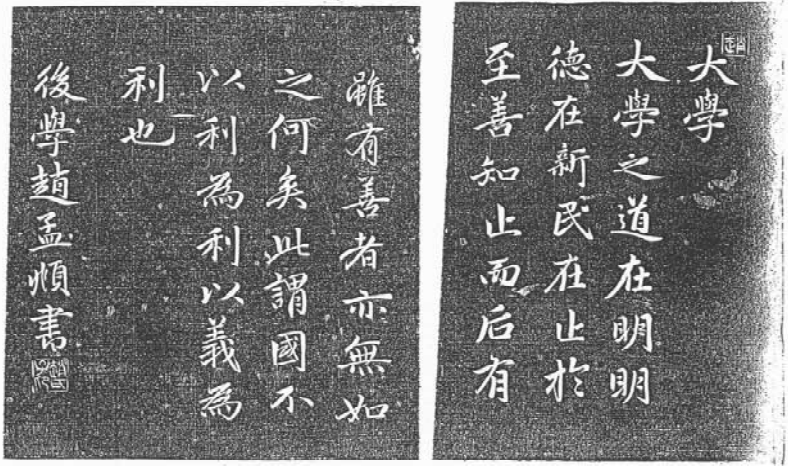


図5・摺り放し版の冒頭と本文末尾部分



面である。見開き面数の違いは字詰めによるものである。もう一つの大きな違いは、半面に四行七字を一紙として貼りこまれているのが沼尻竜厓版である。また部分的に確認できるのが、沼尻竜厓版は、下部に界線が引かれているのがそのまま摺られて見えることから、版面の様子をうかがい知れること。(図3参照)

では和刻法帖の『大学』はこの二種類のみかといえよう。他には左版と別な正面版が確認される。いずれも家蔵のもので比較しよう。

左版『大学』は表紙が改装されて原型を留めず、書物としての原寸は確かめられないが、字詰めは沼尻竜厓版と同じ。袋とじ、四針眼。三十二丁の本文。冊末三十二丁に「京師書林 栗山宇兵衛寿梓」と見える。(図4参照)これを以下「栗山版」と呼ぶ。印刷面サイズは縦二十三・七乃至八程度で二十四cmには満たない。横は三十五cm程度でこれを折って袋とじにしている。文字の姿から趙子昂真蹟と伝えられるものを写しているようだ。つまり咸章堂版、沼尻竜厓版と同じ原稿に拠ったものと察せられるが、粗刻である。刊行年を知ることはこの本からは出来ない。

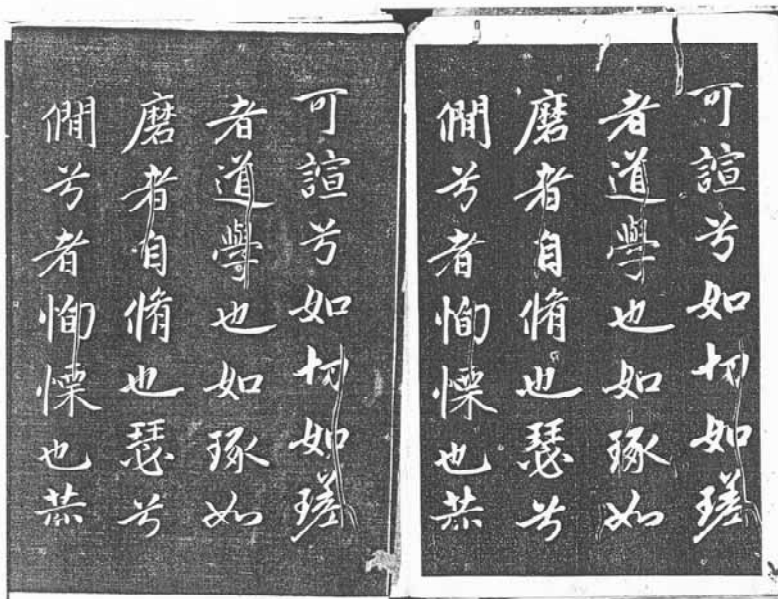
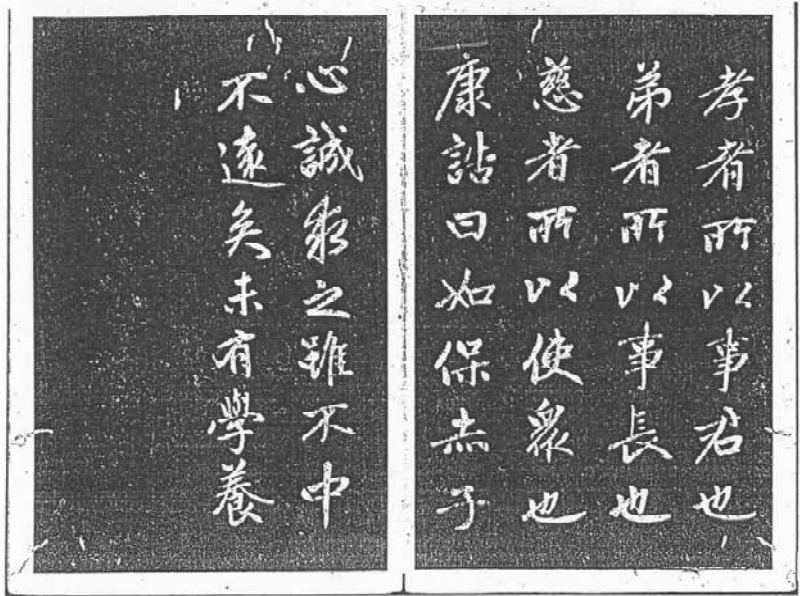


図6・沼尻竜厓版と摺り放し版との比較

正面版の今一つは製本されていない摺り放しの三十二枚とバラ数葉である。(図5参照)当初これが沼尻竜厓版ではないかと考えたが、沼尻竜厓刻とする確証が得られないまま収蔵していたものである。今回沼尻竜厓版と直接比較検討することが出来た。版刻の姿、印刷の風合いなどは沼尻竜厓版に似る。字詰めも同じである。しかし精査して見ると細部の異なりから別版と見るべきである。例えば沼尻竜厓版に見えた下部界線はこちらの版には行われていない。(図6参照)個別に一文字ずつ字姿を比較しても同じ版から摺られたものとは言えない。或いは沼尻竜厓の手にかかったことを全否定は出来ないのだが、沼尻竜厓版としてここで扱っている沼尻竜厓署名入りの和刻法帖とは別版であると断定できる。こちらを今仮に「摺り放し版」と呼ぶ。

今、和刻法帖『大学』として、「成章堂版」、「沼尻竜厓版」、「栗山版」、「摺り放し版」の四種が現存することを確認したことになる。その中で、栗山版以外は全て正面版の印刷による和刻法帖である。「摺り放し版」についてはその名の通り未製本で伝存しているもので、製本されている例は未見である。

図7・沼尻竜厓版の見開き第十六面の空白二行部分



三、沼尻竜厓版『大学』の特徴

沼尻竜厓版と摺り放し版が最も似た存在なのであるが、何より異なるのは、第十六面である。見開き八行あるべきものが、沼尻竜厓版はこの面には六行しか刻されておらず、二行分の空白がある。(図7参照)文字が欠損している訳ではなく以下二行分が全て後ろへ送られることになる。この二行分の空白の説明がつかないのである。他本の『大学』法帖にこのような部分は無く、沼尻竜厓版のみの事情である。沼尻竜厓版の別な事例を見ていないので、今回扱った沼尻竜厓版一冊のみの現象かもしれないが、前半十二面までの印刷と以下では摺りの仕上がりが異なる様子である。版摺りが別人での技術的差なのかもしれない。後半は黒く重苦しい摺り上りで、前半の明るさが無くなっていることも指摘しておこう。もとより版刻や印刷は職工の仕事で今日において誰の仕事であるかは伝わりにくい。そのために分業化され親方の下で行われる職人集団による仕事に対して知れる事柄は少ない。そんな事情の中で、書家がかつ版刻まで行っ

た沼尻竜厓という存在が面白くもあるのだが…。沼尻竜厓版『大学』としての一般の特徴を指摘するには一本のみを見て全てを語るのは危険である。それでも他本との比較から、沼尻竜厓版の特色をまとめれば次のようであろう。

①沼尻竜厓版『大学』は正面版印刷であること。

②全部で見開き三十二面。半面あたり四行とし、一行あたり七字。下部に界線を持つ版木であることが知られること。

③帖初に「水戸家御蔵趙子昂真蹟」と刻む文字を持ち（別版の摺りで製本時にこの一行を貼りつけた可能性がある）、末尾には「己未歳 竜厓陸其章摸刻其章」の文字を持つこと（この行の手前一行分に埋木して文字を削った痕跡を持つことも指摘しておく）。

④第十六面には二行分の空白がある事。

これを当面、沼尻竜厓版『大学』の特徴とし、他本と分別する際の要件としておくだろう。もとより摺りの仕上がりや製本が全く同様に行われるということは考えにくいもので、作られた時期が少し違えば何かしら差異が生じるのは手作り作業なのだから当然である。基本的

な考え方として同じ版木から摺り出されていれば、原則的には同じ本と見られるとしておきたい。

四、沼尻竜厓の版刻癖

さらに沼尻竜厓の新たに見つけた版刻仕事をもう一つ紹介しておくだろう。それは顔子、曾子、子思、孟子の四聖人の画と賛を刻んだものである。（図8参照）一枚摺りで、幅に仕立てられている。本紙のサイズは、縦一三五・五cm、横五八cmである。木版によるもので、正面摺りしている。画像部分は薄く摺って明るさを出し、周囲は黒くして文字を浮き上がらせている。画像の明るい部分は擦拓法を使用していることが明白に知れる。左下に「乙卯夏四月 陸其章謹鐫」と署名し、その下に「陸其章」の印影も刻んでいる。乙卯の干支は寛政七年（一七九五）である。

沼尻竜厓の仕事としてこの幅が紹介された例は筆者の管見故か知りえなかった。この版刻仕事はどこからもたらされたのか、その動機が何にあったか、他に類似の仕事があるものは今後の研究を俟つことになるだろう。

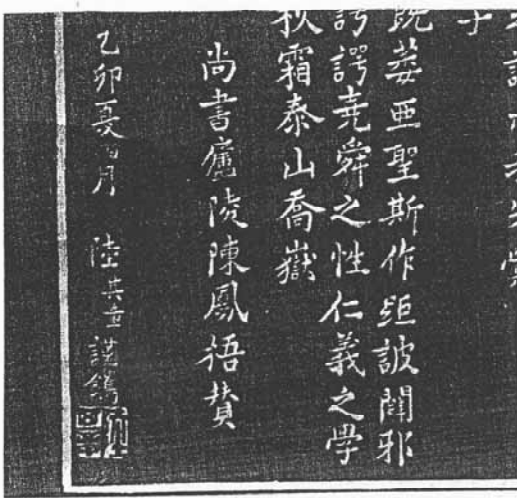


図8・沼尻竜厓の版刻した画幅と署名部分

既に拙稿で紹介済み⁶⁾の沼尻竜厓の版刻については細井廣澤の左版墨本『登楼帖』の仕事があることも付け加えておこう。『登楼帖』は天明元年（二七八一）の上梓。沼尻竜厓の仕事としては早期に属するものである。

沼尻竜厓には『習書論童』という著⁷⁾があり、ここには本人の考え、書流の師承など様々なことを述べている。

この書物はこれまでなかなかお目にかかれないものであったが、最近の国会図書館や大学図書館サービスは親切で、複写を求めれば容易に入手が可能である。ために沼尻竜厓に興味があればこの著書から読まれることをお勧めしたい。また、版刻者としての沼尻竜厓は前述した沼尻墨僊の展観図録中に「老沢館墨本目録」が紹介されており、沼尻竜厓の摸刻した法帖一覧となつている⁸⁾。そこには趙子昂の『大学』は見えないが、和漢の書人四十二件の墨本名称と価格が見えている。いずれも沼尻竜厓の手にかかるものであり、沼尻龍厓の版刻仕事の一端を伝える資料として注目されるものである。その墨本目録と『習書論童』の記載は密接である。沼尻龍厓が『習書論童』の中で評論する九丁ウの尊田親王より以下三十丁ウの文徴明に至る中で多くの書蹟を写したり上木したりし

て家蔵していると発言する。主なものでは橋逸勢や具平親王、小野道風、武田信玄、万里小路藤房、加藤清正銅印、一休和尚、大石内蔵助、石川丈山、貝原篤信、米元章、黄山谷、文衡山などについて蔵すとしてるところから、版刻癖の一端がうかがい知れる。その成果が結果的に老沢館墨本というシリーズに仕上がっていたものと考えられる。和漢の古今の優れた書を写すということは書法学習上よく行われることであるが、それを版にして墨本に作るころまで進めた点に沼尻竜厓らしさがあると評価できよう。単に自己のみのものとせず、出版して広めることは細井廣澤以来の書法啓蒙の一手段であり、細井九阜、沼尻竜厓とそれが継承されていったとも見える。ここを評価しなくては沼尻竜厓の真価を問うことは出来ないだろうと思われる。

五、書家としての沼尻竜厓

以下では書家としての沼尻竜厓を見ておく事としよう。まず、沼尻竜厓の師承を考えたい。沼尻竜厓は一説に関其寧門人とするが、おそらく「関其寧」と「陸其章」

が近似していたために出た説か、どちらも土浦藩に仕えるといった関係から察せられたのではなからうか。「陸」というのは「沼尻」から来ているものだろう（沼の尻は陸地であるとは北川博邦先生談）。しかし自ら述べるころでは細井九阜門人であり、つまりは細井廣澤門流に連なることは自著『習書論童』にも見えており、その位置づけは間違いなき事柄だろう。では書風においてどうなのか、家蔵の細井九阜と沼尻竜厓の肉筆法帖からそれぞれの書を上下に並べ掲げてその実際を比較しておこう（図9参照）。合わせて肉筆書幅も少し掲げておく。



図9・上段沼尻竜崖の書、下段は師の細井九臈書



ついでに『習書論童』の十五丁ウに加藤清正が使っていたという「履道応乾」銅印の印影を版刻し「加藤清正の用いたる印章。是は必ず銅印なるべし。摸刻して蔵す」といい、実際に摸刻の印を自分の書作に用いる事例が確認できる。(図10参照)

おそらくこの印に限らず自家用の印の多くは自作にかかるものと思しい。つまりは篆刻家としての一面も沼尻童涯にはあったものと考えられる。



図10・沼尻童涯書の引首印として履道応乾印の使用例と筆跡部分

沼尻童涯の肉筆は比較的見る機会が少ない。また同時代、同じ門流の同じ世代の書についても紹介される機会は少ない。それら書人の研究もこれから着手される事となるのだろう。ここで少し沼尻童涯の書も見ておきたい。(図11①～③参照)

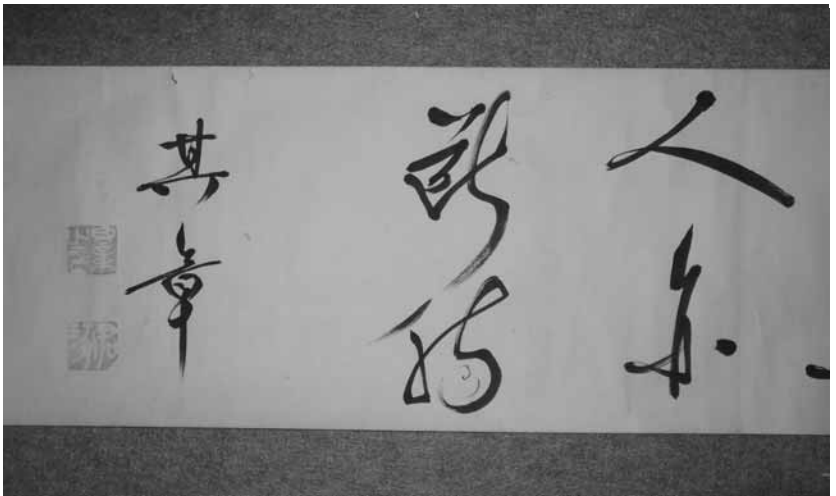


図11・沼尻童涯の肉筆卷子①

図11・沼尻竜涯の肉筆卷子②



図11・沼尻竜涯の肉筆卷子③



肉筆卷子から「古文」「隸書」「草書」を掲げた。いずれの書体も書きこなすところが書家として自認する実力といったところであろう。

書家沼尻竜厓に碑の書丹もあつてしかるべきなのが、八王子の「塩野鶏沢先生碑」の篆額は中西慶爾『訪碑紀行』で触れるところだが、他に無いか探せば、千葉県流山にあつた⁹⁾。碑というより石標というべきもので、「成田山」と篆書で刻むものである。これが沼尻竜厓の書丹にかかるもので、文化丙子仲冬というから十三年。西暦で一八一六年の立碑であつたらう(図12)。



図12・沼尻竜厓書丹の石標「成田山」

六、おわりに

最後に沼尻竜厓の位置づけを自身が述べた『習書論童』とは少し違う目線で江戸の唐様書道書家を眺めてみたいものである。つまり同時代同門のライバルの書家にも視野を広げて考えたい。

沼尻竜厓と同門。細井九臯の門人で沼尻竜厓の語らぬ人物を探すと、松本龍澤があつた。沼尻竜厓との直接の接点は探し出せなかつた。伝記は『事実文編』¹⁰⁾に見え、また浅草寺の奥山に松本龍澤門人の正木龍眠が書いた大きな隸書碑が立つ。これによって松本龍澤は細井廣澤門人矢野玉洲を頼つて江戸へ出て、細井九臯の門に入つてゐることが知れる。松本龍澤には『習書論童』のような書論書は無いが『小学題辞』という墨本が出版されている。また肉筆法帖、肉筆幅などもあることから当時はそれなりに流行つた書家であつた事、たろう。

また、細井九臯門には松山天姥という書家がある。天保三年上梓の『統諸家人物志』では最初は細井九臯門人とする。「名は敬和、字は伯義……」と。実は江戸時代の筆

記が全て毛筆という条件に制限された文字世界であったこと、その中で自他ともに書に優れているという評価を社会的に獲得することには、現代とは比較にならないほどの価値があったはずである。今日ほとんど知られていないとしても書家としての評価とその仕事の発見は、江戸時代の書家の評価をもう一度考え直すきっかけになるだろう。今回はわずかに沼尻竜涯を扱ったに過ぎないが、本来、書家に限っても多士済々の時代である。

沼尻竜涯やその同門唐様書道書家たちが話題に上ることとは今日では殆どないのであるが、そんな広がりがあったからこそ江戸時代の唐様書道流行は支えられていた。

『習書論童』を読めば今日にも通用する見識の広さも知れる。事実それが江戸時代後期には啓蒙的著述として初学者向けに出版されていたのである。手本や肉筆の存在を切り口に、そこをもう一度確認しながら、江戸時代の毛筆文化の広がりと深さを考えたいものである。

【註】

- (1) 第三〇回特別展『沼尻墨僊―城下町の教育者』土浦市立博物館刊、平成二十一年（二〇〇九）三月二二日。「沼尻修平―墨僊に影響を与えた従兄」木塚久仁子（p91）100）。年譜は同図録p78・79に掲載されている。沼尻墨僊のみならず沼尻竜涯に関しても有効な資料集として利用価値は高い。
- (2) 『近世書人の表現と精神』米田弥太郎著、柳原書店、1999。7. 28刊。p68〜71参照。
- (3) 『書の友』昭和十五年十一月三日発行臨時増刊号、雄山閣刊。また昭和六一年二月二十日刊として『書の友』臨時増刊号六冊を復刊したものがある。
- (4) 『国学者雑攷』、別冊『刻師名寄』丸山季夫著、昭和五十七年九月三〇日、吉川弘文館刊。p126下段「又の部」に掲載。見出しは「沼尻収平」とし、出典には註3の望月論考を掲げている。
- (5) 沼尻竜涯が楽翁の雅会の様子を伝えた手紙があった。註1の図録では、森銑三の論考から引用する。註3の望月論考も同じ手紙を引く。琴棋書画に分けてメンバーを記している。書には4名が見え、「御儒者」として柴野彦助（栗山）、尾藤良助（二洲）、「隠士」として沼尻修平、

「門人白川邸家来」として長尾諫見（大池）の名が並ぶ。

長尾大池は家蔵に正面版版木があり、楽翁隸書「東銘」を下賜され、それを上梓した人物でもある。沼尻竜厓の雅会参加に対して影響したのは長尾氏であった。望月論考に引く別の尺牘によればその長尾大池が亡くなった後、沼尻竜厓と楽翁との関係は途絶えたものようである。『習書論童』の中では「白河侯臣長尾元長大池と号す、武吏にて文筆を好み陸其章に問ふて墨本の製作数多なり」（二十九丁オ）とも見える。

(6) 『登楼帖』については『書物・出版と社会変容』第7号、2009年、同研究会発行。「和刻法帖の精度と作為」の中で触れている。

(7) 『習書論童』は青霞堂（沼尻竜厓の室号ならん）の蔵版。全一冊。版下の書は沼尻竜厓自筆と思われる。

(8) 「老沢館墨本目録」は、土浦市立博物館第三〇回特別展図録『沼尻墨僊』p42に内容が翻刻掲載されている。摸刻は沼尻竜厓。蔵板は磯沼氏としている。八王子在住の門人に磯沼亀峰という人物があった。亀峰の印が捺されている隸書の肉筆千字文の冊が手元にある。八王子といえは塩野鶏沢先生碑の篆額は沼尻竜厓書丹という（訪碑紀行二、中西慶爾編、昭和五九年一月二十日、木耳社

刊。「八王子の適齋父子の碑」p143～149参照）。

(9) 千葉県流山市流山6-651光明院にある。
(10) 『事実文編』五弓豊太郎編、明治四四年一月二八日、国書刊行会刊。「瀧沢世古先生之碑」正木瑣吉、五十四卷、p236～p237